

イタリア語における R-Tutti と L-Tutti について

石 岡 精 三

Some Notes on R-Tutti and L-Tutti in Italian

Seizo ISHIOKA

Key Words: Universal Quantifier Phrase (QP) , SUBJECT, X⁰ Binding

0. はじめに

以下の (1) と (2) で観察されるように, QP (Quantifier Phrase) はそれが基底生成された位置から上位の位置へ移動可能である.

(1) (Van Tiel Di-Maio 1978: 44-46)

- a. tutti gli amici regaleranno un libro a Paolo¹⁾
- b. gli amici regaleranno tutti un libro a Paolo
- c. *gli amici regaleranno un libro tutti a Paolo
- d. regaleranno un libro a Paolo tutti gli amici
'all the friends will give a book to Paolo'

(2) a. *Gianni vuole tutti leggere i libri

'Gianni wants to read all the books'

- b. (?)Gianni vuole tutti legger li (Doetjes 1992: 30a-c)
- c. Gianni li vuole tutti leggere
'Gianni wants to read them all'
- d. Piero li comincerà (tutti) a (*tutti) costruire
'Piero will start to build them all'

原稿受付: 平成6年6月10日

*長岡技術科学大学語学センター

Kayne (1975, 1984) と同様に, VP 内部 (VP に付加した位置) に生成される主語要素としての QP が関与する (1b) のような事例を R-Tutti と呼ぶ。同様に, (2b-d) で観察されるように, QP が V の sister 位置に生成される場合の事例を L-Tutti と呼ぶ。(1b) と (2b-d) における QP の構造として (3) を想定し, Universal Quantifier が Definite DP を下位範疇化すると考える (cf. Giusti 1991)。

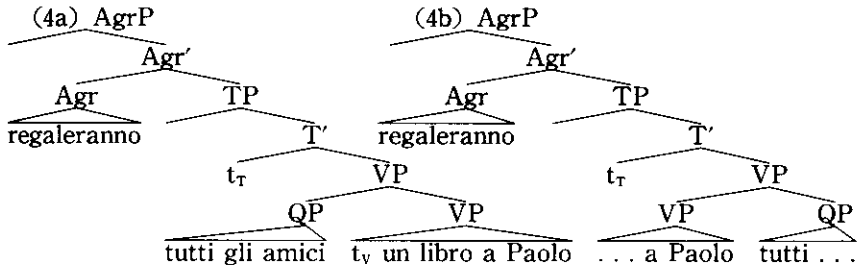
(3) [_{QP} SPEC (Q) [_{Q'} Q [_{DP} SPEC (D) [_{D'} D [_{NP} . . .]]]]]]

R-Tutti と L-Tutti は, Q (Quantifier) によって選択される DP が何らかの引き金 (Trigger) によって上位位置へ移動する場合に発動する。(1b) では, 主語 DP (QP) ((*tutti gli amici*) に対する Case Filter の要請により, 当該主語要素が matrix SPEC (Agr) 位置へ移動する。²⁾同様に, (2b-d) において, DP と考えられる clitic (*li*) は機能範疇の主要部位置へ付加移動する。³⁾両事象, 特に L-Tutti に対するこの発動条件は, (2a) において明示される。本稿では, この両事象を共通に説明すると思われる論法が提示される。具体的には, それが下位範疇化する DP の移動によって残置された QP が, 一定条件の下で, 基底生成された位置から上位の SPEC 位置へ移動すると想定される。第 1 節では, R-Tutti の詳細が検討され, Q が下位範疇化する DP の移動条件が画定される。第 2 節では, 本稿で検討される L-Tutti の用例が提示される。特に, Restructuring Construction (RESTR) での挙動が考察される。第 3 節において, 両事象を説明すると思われる仮説群が提案される。第 4 節は結語を構成し, 本稿の仮説群による予測が提示される。

1. R-Tutti

1. 1. 最初に, 用例 (1) を検討する。(1a) は, QP 全体が matrix SPEC (Agr) 位置へ移動した場合の派生である。(1d) は, 主語 QP が VP に左方付加した位置に生成された場合の派生と考えられる。また, (1c) の非文性は, Q (*tutti*) が基底生成された位置にあると想定することにより説明可能である。以下の構造 (4a-b) が示すように, VP に左方付加した位置に基底生成される主語 QP は, V の直接目的語 (DO) DP (*un libro*) に先行する (1b)。VP に右方付加した位置に生成される主語 QP は, 間接目的語 (IO) (*a Paolo*) に後続することになる (1d)。結果として, (1c) は生成不能として, 非文と予測される。⁴⁾

このように、イタリア語において、主語要素はVPに左方、あるいは右方付加した位置に生成される。Belletti (1990: p. 67) が指摘するように、非複合時制におけるQは定動詞の直後に生起し、Complementに先行する (cf. (5)).



- (5) a. gli invitati salutarono tutti Maria (Belletti 1990: p. 67, 83a)
 b. *gli invitati tutti salutarono Maria (ibid.: p. 68, 84a)
 'all the guests greeted Maria'
 c. gli invitati parlarono tutti con Maria (ibid.: p. 67, 83b)
 d. *gli invitati tutti parlarono con Maria (ibid.: p. 68, 84b)
 'all the guests talked with Maria'

(1b)と(5a, 6a)は何を物語るのであろうか。ここで、以下の仮説を設定する。

(6) Hypothesis : ⁵⁾

In Italian, only a subject Universal Quantifier whose maximal projection (QP) is base-generated in the left VP-adjointed position allows its sister DP to move from within the QP.

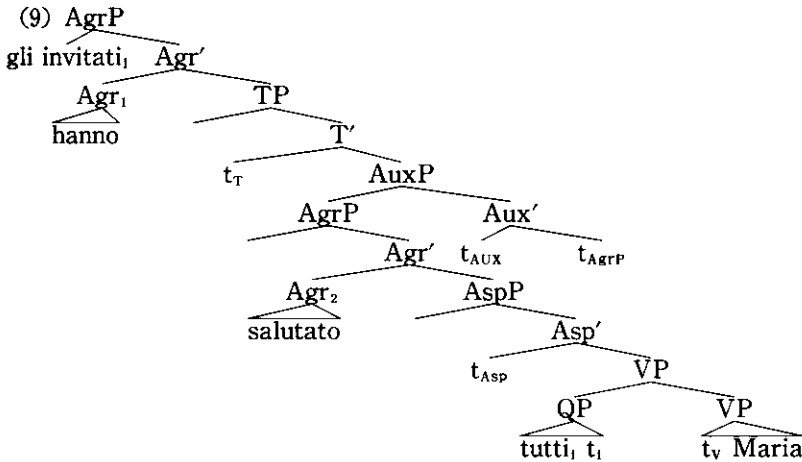
仮説(6)により、以下の予測が可能となる ((7)はすべて非文と考えられる)。

- (7) a. *gli amici regaleranno un libro a Paolo tutti
 'all the friends will give a book to Paolo'
 b. *gli invitati salutarono Maria tutti
 'all the guests greeted Maria'

- c. *gli invitati parlarono con Maria tutti
 'all the guests talked with Maria'

V が複合時制である以下の用例は、DP の移動によって残置された QP が基底生成された位置から上位の SPEC 位置へ移動可能であることを示す。⁶⁾例えば、(8a, c) の構造として、(9) が想定される。V (*saluta-*) が Asp 位置へ主要部移動することにより過去分詞形態(*salutato*)が形成され、更に、この Asp の複合体は Agr₂ 位置へ移動する (cf. Belletti 1990)。基底生成された位置にある主語 QP 内の DP が matrix SPEC (Agr) 位置へ移動する (Case Filter)。Aux 要素は、T 位置を経由して、matrix Agr まで移動する。⁷⁾

- (8) a. gli invitati hanno salutato tutti Maria
 (Belletti 1990: p. 69, 86a-b)
 'all the guests have greeted Maria'
- b. gli invitati hanno parlato tutti con Maria
 'all the guests have talked with Maria'
- c. (?) gli invitati hanno tutti salutato Maria (ibid.: 87a-b)
 'all the guests have greeted Maria'
- d. (?) gli invitati hanno tutti parlato con Maria
 'all the guests have talked with Maria'



当該 DP の移動によって残置された QP (*tutti*) は、SPEC (Asp) あるいは、SPEC (T) 位置へ移動する。残置された QP が基底生成された位置にとどまる場合と、SPEC (Asp) 位置へ移動する場合には、(8a) が生成される。⁹⁾

前述のように、主語 QP が VP に左方付加した位置に基底生成された場合に、Q によって下位範疇化される DP の移動が発動する。更に、DP の移動によって残置された QP がある特定の条件下で、上位の SPEC 位置へ移動する。

この論法は、Sportiche (1988), Belletti (1990) のそれとは異なるものである。更に、FQ を副詞位置に生成する Doetjes (1992) と異なる。Doetjes (1992: p. 321-322) は、以下のフランス語用例 (10a-b) における QP (*tous*) が、VP-Initial Adverb と同じ位置 (VP に左方付加した位置) に基底生成されると考える。

- (10) a. les enfants ont tous vu ce film (Doetjes 1992: 17)
 b. ?*les enfants ont vu ce film tous (Doetjes 1992: 8b)
 c. les enfants ont vu tous ce film

'all the children have seen this movie'

- (11) a. ?*loro hanno spesso riso (Belletti 1990: 88a-b)

'they have often laughed'

- b. (?) loro hanno tutti riso

'they have all laughed'

イタリア語の副詞 (*spesso* (*often*)) もまた, VP-Initial Adverb と考えられる (Belletti 1990). (10) と (11) に対して, (9) の構造を想定する. 少なくとも, [+Finite] AgrP の構造が, イタリア語とフランス語において同一と考える (Aux と V がイタリア語のそれと同じ移動形式をとる). Doetjes (1992) の論法では, QP (*tous*) は, 基底生成された位置にとどまる.⁹V は, Asp 位置を経由して Aux によって下位範疇化される AgrP の主要部へ移動する. 結果として, 生成されるのは (10c) であり, (10a) ではない ((10a) は生成不能として, 非文と予測されることになる).¹⁰さらに, *spesso* と *tutti* が同じ位置に基底生成され, 移動しないと前提した場合には, (11a-b) の相違が説明されない. 一方, 本稿の論法は, (10a, c) と (11b) を適格に文法的と予測する.

1. 2. 次に, 使役構文と知覚構文における R-Tutti の用例を検討する. 基底生成された位置にある matrix V の主語 QP が DP の移動によって残置され, さらに, 残置された QP が一定条件の下で上位の SPEC 位置へ移動することが例証される. 最初に, Fare 使役構文の用例を考える.

(12) a. faranno leggere tutti quella pagina a Gianni¹¹

(Belletti 1990: p. 136, fn. 56)

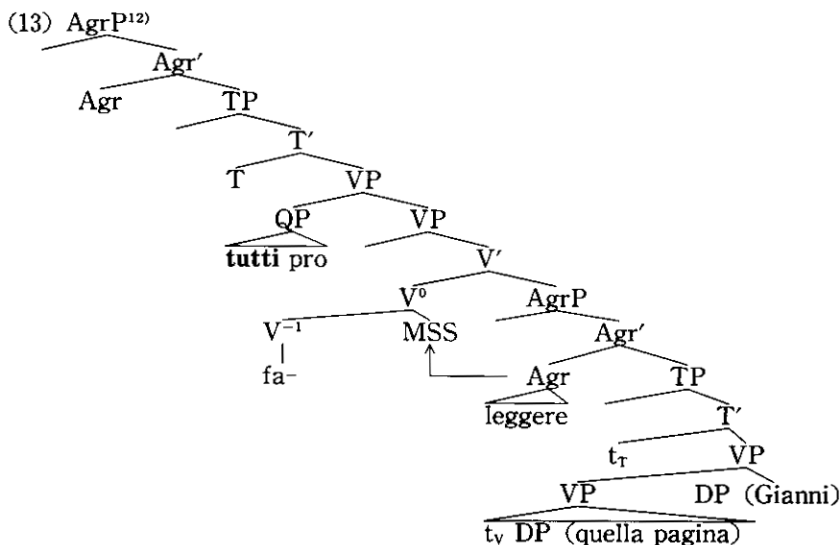
b. ?faranno tutti leggere quella pagina a Gianni (ibid.)

c. *faranno leggere quella pagina tutti a Gianni

d. *faranno leggere quella pagina a Gianni tutti

'they will all make Gianni read that page'

石岡 (1993, 1994) と同様に, 使役動詞 (*fa-*) は AgrP を下位範疇化すると考える. embd. V の T 位置への移動により不定法形態が生成され, さらに, この T の複合体が embd. Agr 位置へ移動する. Fare 使役動詞を導入する V (*fa-*) は, V⁻¹ の投射をもち, 当該投射の sister 位置に, 不定法形態の動詞が移動する Morphologically Selected Slot (MSS) が存在する (cf. Roberts 1991, Guasti 1991). 不定法形態の動詞が MSS 位置へ移動した段階で複合動詞 (CV) が生成する. (12) の構造として, (13) が想定される.

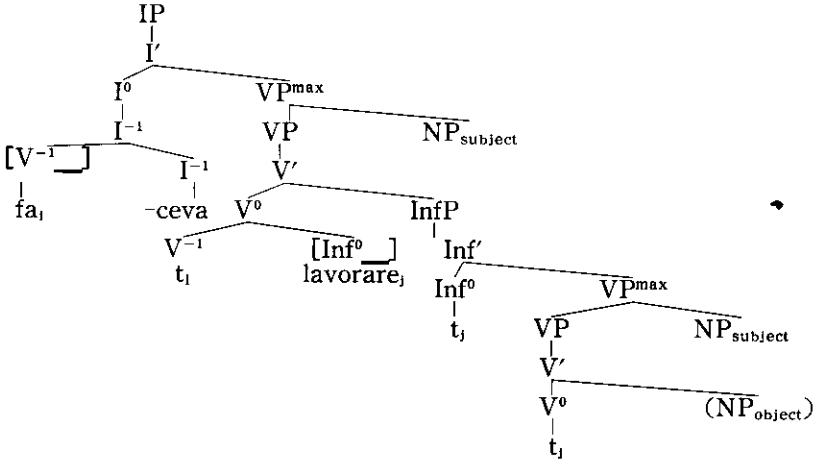


石岡 (1993, 1994a, b) において、不定法形態の動詞が MSS 位置でその移動を停止し、matrix V (*fa-*) が T 位置を經由して Agr 位置まで移動すると前提された。しかし、この前提により、(12b) の生成は可能であるが、(12a) は非文と予測されることになる。MSS 位置にあると考えられる不定法形態は、VP に左方付加した位置に生成される QP (*tutti pro*) の後位置に生起すると予測されるためである。つまり、本稿の仮説群は、QP (*tutti*) が不定法形態の動詞の後位置に生起する (12a) を説明できない。

この問題は、Guasti (1991) の説明方を援用することにより打開可能である。Guasti (1991) は、イタリア語の使役構文における matrix V⁽⁻¹⁾ (*fa-*) が Infinitive Phrase (InfP) を下位範疇化すると考える。また、本稿と同様に、不定法形態が生起する Inf⁰ が matrix V (*fa-*) の MSS 位置へ移動すると考える (Guasti (1991) では、MSS が [Inf⁰] と表記される)。結果として、以下の (14) は、(15) の構造をもつことになる。同様に、I⁰ もまた、MSS 位置をもつ (その位置には、matrix V (*fa-*) の場合と反対であるが)。不定法形態の動詞が matrix V (*fa-*) の MSS 位置へ移動することによって生成された CV (matrix V⁰ 全体) が、matrix I⁰ 位置へ付加移動し、さらに、V⁻¹ としての *fa-* が I⁰ の MSS 位置へ移動すると想定される。¹³⁾

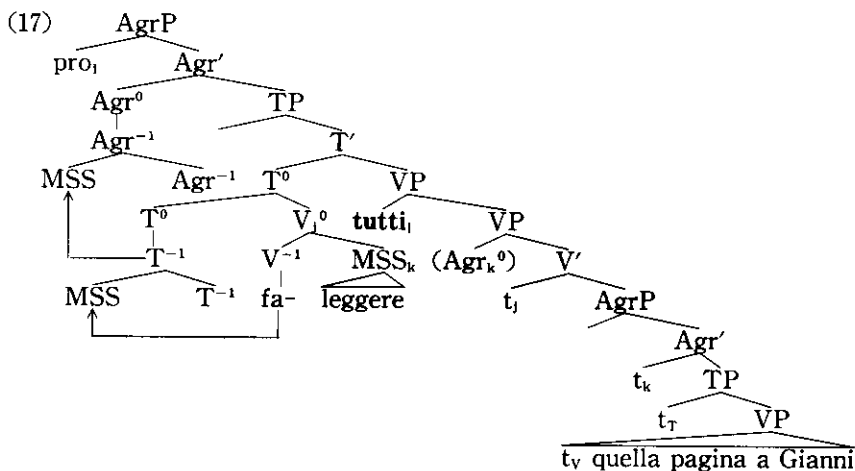
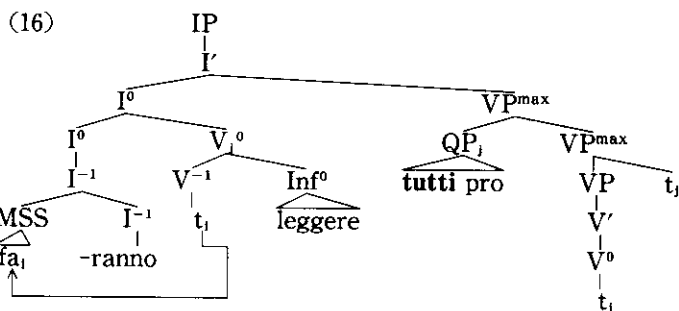
- (14) Maria faceva lavorare molto Gianni (Guasti 1991: 2)
 'Maria made Gianni work a lot'

- (15) (Guasti 1991: 17)



(15)の場合と同様に, Guasti (1991) は, (12)に対応する構造(16)において, matrix V^0 全体が I^0 位置へ付加移動し, その後の V^{-1} (*fa-*) が I^0 の MSS 位置へ移動すると考える. 加えて, QP (*tutti pro*) が $VP^{(max)}$ に付加移動すると考える. 本稿の仮説群(特に, 仮説(6))は, Q (*tutti*) の sister 位置に生成される *pro* が SPEC (I) 位置へ移動すると前提することにより, QP (*tutti pro*) の $VP^{(max)}$ への付加移動を不要にする. それは, 当該 *pro* が SPEC (I) 位置へ移動すると前提した場合に, QP (*tutti pro*) が VP に左方付加した位置に生成されるためである.¹⁴⁾

Guasti (1991) の論法は, 本稿で前提される使役構文の構造(13)にも適用可能である. matrix V^0 全体が T^0 位置へ付加移動した段階で, V^{-1} としての *fa-* が T 経由して, matrix Agr 位置まで移動すると前提する (17).



(17) の構造は、DP (*pro*) が、基底生成された位置にある QP (*tutti pro*) 内部から SPEC (Agr) 位置へ移動し、結果として、当該 QP (*tutti*) が残置されることを示すものである。この論法は、(12a) を適切に文法的と予測する。(12b) は、残置された QP (*tutti*) が matrix SPEC (T) 位置へ移動した派生として説明される。(12c) は、DP (*quella pagina*) と embd. AgrP 中の主語 DP (*Gianni*) の間に Q (*tutti*) の最大投射が生成不能であるため、非文と予測される。(12d) は、主語 QP (*tutti pro*) が VP に右方付加した位置に基底生成される場合の派生である。仮説 (6) により、*pro* の SPEC (Agr) 位置への移動が排除される。結果として、(12d) は非文と予測される。

1. 3. 次に、知覚構文と *Lasciare* 使役構文における QP の挙動を検討する。

(17) で示されるように、これらの構文は2種の実現形態をもつ。

- (17) a. *Maria vide Giovanni scrivere una lettera* (Burzio 1978: 74)
 b. *Maria vide scrivere una lettera a Giovanni*
 'Maria saw Giovanni write a letter'
 c. *Mario lasciò Giovanni accendere la luce*¹⁵⁾ (Burzio 1978: 123a)
 d. *Mario lasciò accendere la luce a Giovanni* (Burzio 1978: 123a)
 'Mario let Giovanni turn the light'
 e. **Maria fece Giovanni scrivere una lettera*
 f. *Maria fece scrivere una lettera a Giovanni*
 'Maria made Giovanni write a letter'

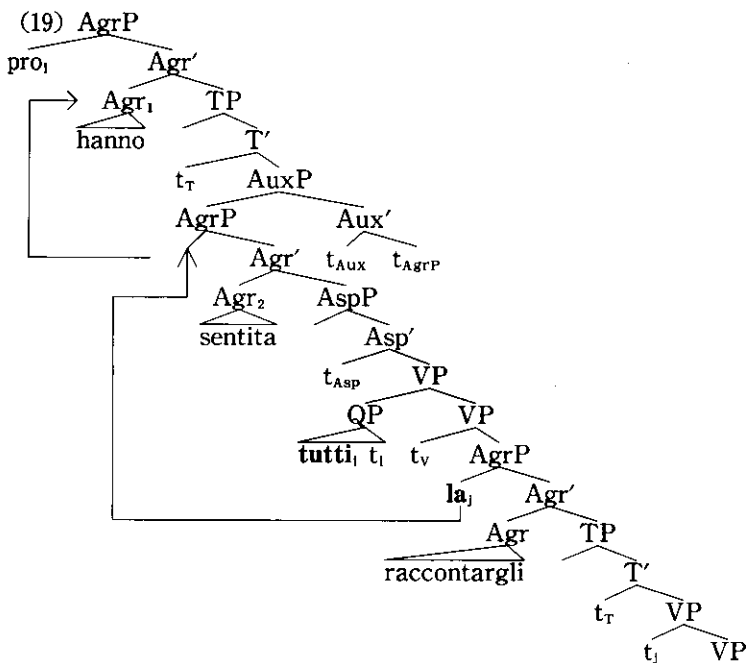
知覚構文と *Lasciare* 使役構文を導入する matrix V は、*Fare* 使役構文の場合と同様に、AgrP を下位範疇化すると考える。(17b, d, f) は、*Fare* 使役構文と同じ派生プロセスによって生成される(不定法形態の動詞が、matrix V⁰ の MSS 位置へ移動し、CV が形成される)。*Fare* 使役構文においては、不定法形態の動詞が義務的に matrix V⁰ の MSS 位置へ移動する。一方、知覚構文と *Lasciare* 使役構文では、不定法形態の動詞の当該 MSS 位置への移動が随意的に発動する。つまり、embd. T 位置において形成された不定法形態の動詞が、embd. Agr 位置へ移動した段階でその主要部移動を停止する派生も可能である(よって、CV が形成されない)。embd. VP に付加した位置に生成される主語 DP (*Giovanni*) は、embd. SPEC (Agr) 位置へ移動することにより、matrix V から Acc を付与される。embd. V が DP (*una lettera, la luce*) に Acc を付与する(詳細は、石岡 (1993, 1994a, b) を参照されたい)。

具体的に、matrix V の主語 QP が生起する用例 (18) を検討する。

- (18) a. tutti l'hanno sentita raccontargli la verità¹⁶⁾
 (Van Tiel Di-Maio 1978:49-51)
 b. l'hanno sentita tutti raccontargli la verità
 c. *l'hanno sentita raccontargli tutti la verità
 'they have all made her tell the truth to him'

embd. V の主語 clitic (*l' = la*) は Acc を付与されている。当該主語は、基底生成された位置から embd. SPEC (Agr) 位置へ移動することにより、matrix V

から Acc を付与される (不定法形態の動詞が embed. Agr を経由して MSS 位置へ移動した場合、CV が基底生成された位置にとどまる主語 clitic に付与される格は Dat (*gli*) である)。¹⁷⁾つまり、(18) に対して以下の構造 (19) が想定される。



QP (*tutti pro*) 全体が matrixSPEC (Agr) 位置へ移動した場合には、(18a) が生成される。 *pro* が単独で matrix SPEC (Agr) 位置へ移動した場合には、QP (*tutti*) の移動が可能となる。当該 QP が基底生成された位置にとどまる、あるいは、SPEC (Asp) 位置へ移動する場合には、(18b) が生成される。(18) において、CV は形成されない。よって、Fare 使役構文において観察されたような、MSS 位置に不定法形態の動詞を含む matrix V⁰ 全体が直接上位の範疇の主要部への付加移動は発動しない。結果として、QP (*tutti*) が不定法形態の動詞に後続する派生はありえない ((18c) は非文と予測される)。

これまで設定された本稿の仮説群は、以下の予測を可能にする。

- (20) a. Ihanno tutti sentita raccontargli la verità
 b. *Ihanno sentita raccontargli la verità tutti
 'they have all made her tell the truth to him'

2. L-Tutti

2. 1. 第1節において、DPの移動によって残置されたQP (*tutti*)が基底生成された位置にとどまる、あるいは、上位のSPEC位置への移動する可能性が示された(R-Tutti)。第2節では、DP (clitic)の移動によって残置されたQPがR-Tuttiに類似する挙動を示すことが指摘される。以下のフランス語とイタリア語用例からも判明するように、QP (*tous*, *tutti*)はそれが基底生成された位置から移動する(基底生成された位置にとどまる可能性もある(21c-d))。

- (21) a. je les ai tous lus (Quicoli 1976: 4)
 b. li ho tutti letti
 'I have read them all'
 c. je les aime tous (Milner 1987: 22b)
 d. li amo tutti
 'I love them all'
 e. *Jean a tous vu mes amis (Quicoli 1976: 7)
 f. *Gianni a tutti visto i miei amici
 'Jean/Gianni has seen all my friends'

(21e-f)は、DPの移動によって残置された場合に限り、QPが上位のSPEC位置へ移動可能であることを示す。(21a-b)において、残置されたQPの移動先と想定されるのは、SPEC (T)位置である。また、残置されたQPが基底生成された位置にとどまる場合と、SPEC (Asp)位置へ移動する場合には、(22)が派生する。¹⁸⁾

- (22) a. je les ai vus tous
 b. li ho letti tutti
 'I have read them all'

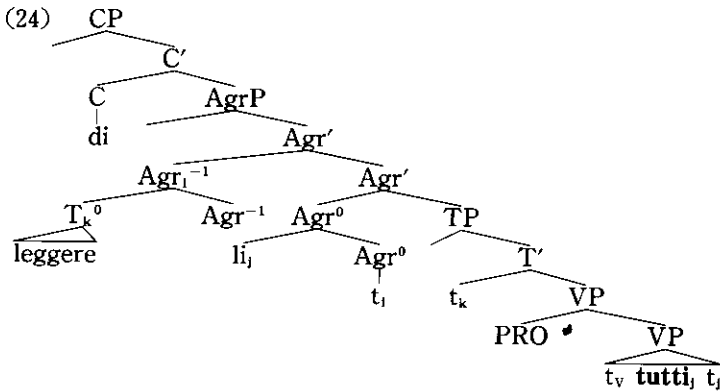
Jaeggli (1982) は、イタリア語における L-Tutti の存在を否定する (ロマンス語の中で、唯一フランス語に存在すると言う)。Sportiche (1988) の論法によると、R-Tutti と L-Tutti は異なるプロセスによって説明される。しかしながら、本稿の第1節と上の (21-22) は、両事象がイタリア語にも存在し、類似のプロセスによって説明される可能性を暗示する。¹⁹⁾本稿では、主としてフランス語、イタリア語とスペイン語の使役構文での接語化 (Cliticization) を説明する X^0 Binding (XP Binding) による論法が提案される (第3節)。

2. 2. 最初に、以下の (23) の相違を検討する。

- (23) a. *ha promesso di tutti leggerli (Doetjes 1992: 27a)
 b. ha promesso di leggerli tutti (Doetjes 1992: 28)
 'he has promised to read them all'

残置されたQP (*tutti*) は、不定法形態の動詞の後に生起する。不定法形態 (*leggere*) は、どの位置にあるのか。Belletti (1990) が指摘するように、イタリア語の不定法 AgrP([-Finite] AgrP) 中の V は、Agr 位置まで移動する (つまり、[+Finite] AgrP 内の V と同じ挙動を示す)。イタリア語の clitic は、不定法形態の右位置に生起する。

ここで、イタリア語の不定法形態について検討する。不定法 AgrP 内の V が T 位置へ移動することにより、不定法形態が形成される。この T の複合体はさらに上位の位置へ移動する。clitic は、格が付与された段階で、ある局所領域内にある最上位の機能範疇の主要部へ付加移動する。また、この機能範疇の主要部 (X^0) に対する付加は、左方付加によって発動すると考える (移動によって空となった主要部への付加は許容されない) (Kayne 1989, 1991)。 (23) に対応する構造 (24) において、clitic が不定法形態の右位置に生起する事象は以下のように説明される (Kayne 1991)。



VがT位置へ移動することにより、不定法形態 (*leggere*) が形成される (厳密には、VがT⁻¹の sister 位置にある MSS 位置へ移動することにより形成される)。さらに、この不定法形態を含む T⁰の複合体が Agr⁻¹の MSS 位置へ移動する。また、不定法形態を含む Agr⁻¹が、Agr'位置へ付加移動する。clitic (*di*) は、基底生成された位置で Acc を付与され、Agr 位置へ付加移動する。このプロセスにより、(23)で観察される不定法と clitic 要素の語順が生成されることになる (Cliticizationの詳細は、2.3で述べる)。

(23)で示されるように、残置されたQP (*tutti*)のSPEC (Agr)位置への移動は許容されない。つまり、当該QPが移動する場合、その移動はSPEC(T)位置までに制限される (この局所性は、第3節で検討する)。

2.3.(24)において、clitic (*di*)がAgr位置へ付加移動する事象はどのように説明されるであろうか。cliticの痕跡がAnaphorであると考え、以下の定義体系を前提する (cliticの痕跡がX⁰ Bindingに従うと考える)。

(25) Binding Principle A (X⁰ Binding) :

The trace of a clitic is bound by its antecedent in its governing category (GC) .

(26) The definition of X⁰ Binding:

YP is bound by X⁰ iff YP and X⁰ are coindexed and X⁰ c-commands YP (c-command being defined with respect to a branching node X' or XP) .

(27) The definition of Governing Category (GC) :

β is a governing category for α iff β is the **minimal functional XP** containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α (cf. Aoun 1985).²⁰⁾

(28) The definition of SUBJECT:

The SUBJECT consists of an **independent active Agr in situ** or of a subject assigned Acc Case (including its trace) which is in its base position or has moved from its base position to a SPEC position to fulfill Case Filter.

(29) Clitic Placement Constraint (CPC) :²¹⁾

A clitic must adjoin to the highest functional X⁰ element in its governing category, (general principles of UG allowing) .

(adapted from Ouhalla 1989: 24) .

Independent Active Agr in situ は、TP を下位範疇化する Agr であり、基底生成された位置にある Agr⁰である(イタリア語の場合、V の移動によって生成する T の複合体を内包するこの Agr⁰は、その sister 要素(TP)を L 標示する)。さらに、格付与において、上位の X⁰範疇に依存しない要素を意味する。よって、[+Finite] [±Subjunctive] AgrP の主要部、(24)の Agr、さらに、CV が形成されない場合の知覚構文 (Lasciare 使役構文)における embd. AgrP の主要部がその例である。²²⁾一方、Fare 使役構文における embd. AgrP の主要部と Aux に下位範疇化される Agr は、当該 **Independent Active Agr in situ** ではない。

(24) における Agr は、**Independent Active Agr in situ** である (よって、大主語(SUBJECT)として機能する)。つまり、基底生成された位置にある clitic (i) に対して GC となるのは、当該 Agr の最大投射である。結果として、当該 clitic は、その GC (AgrP) 内にある最上位の機能範疇の主要部 (Agr) 位置へ付加移動することになる。X⁰ Binding により、以下の用例が説明される。

- (30) a. Maria farà riparare la macchina a Giovanni
 b. Maria la farà riparare a Giovanni
 c. *Maria farà ripararla a Giovanni
 'Maria will make Giovanni repair the car/it'

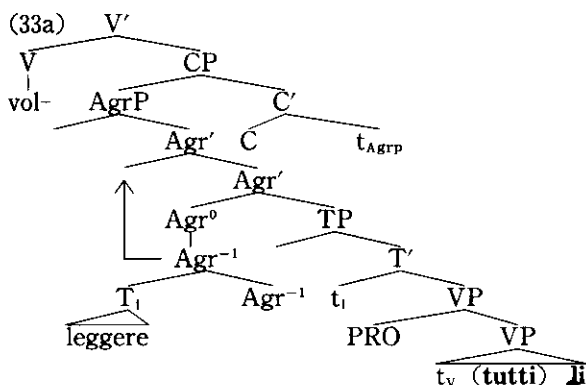
- d. Maria vedrà/lascerà Giovanni riparare la macchina
 e. *Maria la vedrà/lascerà Giovanni riparare
 f. Maria vedrà/lascerà Giovanni ripararla
 'Maria will see/let Giovanni repair the car/it'

残置されたQP (*tutti*) が, clitic と同じ挙動を示すと考えることはできない。そのような前提の下では, QP (*tutti*) がSPEC (Agr) 位置へ移動することになる。つまり, (23a) が文法的と予測されることになる。明らかに, この予測は事実と反する。

2. 4. 次に, RESTR Construction におけるQPの挙動を検討する。最初に, 以下の(32)の構造について考える。

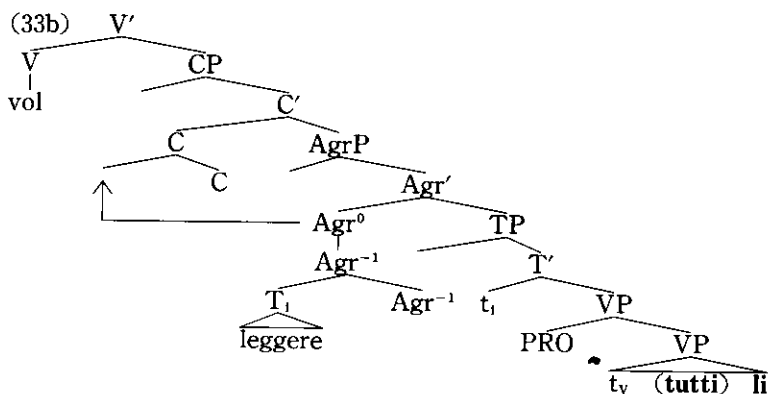
- (31) a. (?) Gianni vuole tutti leggerli (Doetjes 1992: 30a-b)
 b. Gianni li vuole tutti leggere
 'Gianni wants to read them all'
 c. Piero li comincerà tutti a costruire (ibid.: 30c)
 d. *Piero li comincerà a tutti costruire (ibid.)
 'Piero will start to build them all'
- (32) a. Gianni vuole leggerli
 b. Gianni li vuole leggere 'Gianni wants to read them'

RESTR V (*volere*) は, CP を下位範疇化すると考えられる。よって, (32a) の構造(33a)は, 基本的に(24)と同じである。異なるのは, (32a)において, embd. AgrP全体がSPEC (C) 位置へ空移動している点である(語彙的に実現されないCは, そのsisterであるAgrPをL標示しないと考えられる(AgrP=Barrier))。



embd. V (t_v) は、基底生成された位置にある clitic (*li*) に Acc を付与する。(23) の場合と同様に、clitic (*li*) に対して GC となるのは、embd. AgrP である。よって、当該 clitic は、embd. Agr 位置へ付加移動することになる。この論法により、(32a) が生成する。

(32b) は、どのように生成されるか。ここで、RESTR Verb の特殊性を考えなければならない。前述のように、語彙的に実現されない C はその sister 要素 (AgrP) を L 標示しないと考えられる (AgrP=Barrier)。 (33a) において、この AgrP の「障壁」性は、当該 AgrP が SPEC (C) 位置へ空移動することにより相殺される。語彙的要素 (この場合、embd. Agr⁰全体) が、C 位置へ付加移動することによっても、AgrP の「障壁」性は相殺可能である。ここで、この Agr⁰ の C 位置への移動を、RESTR Verb の特殊性と考えることにする。(32b) に対応すると考えられる構造 (33b) において、embd. Agr⁰ は基底生成された位置から移動している。よって、この Agr を **Independent Active Agr in situ** と同定することはできない。当該 Agr は、SUBJECT として機能しない。基底生成された位置にある clitic (*li*) に対して SUBJECT として機能するのは、matrix Agr である。matrix AgrP が当該 clitic の GC となる。結果として、当該 clitic は、定動詞 (*vuole*) が生起する matrix Agr 位置へ付加移動することになる。この論法は、(32b) の生成を可能にする。



(31a-b) の用例を検討する。これらの用例の構造もまた、それぞれ (33a-b) と考えられる。QP(*tutti*)は、不定法形態の動詞に先行する。つまり、QP(*tutti*)は、基底生成された位置から移動している。(31a)におけるQPの着地点として、*embd. SPEC (V)*と*embd. SPEC (T)*を想定することはできない(当該SPEC(T)は、不定法形態の後位置にある)。結果として、(31a)におけるQPは、*embd. SPEC (Agr)*と*matrix SPEC (T)*の間にあるSPEC位置へ移動することになる(後述するように、当該QPは*embd. SPEC (Agr)*位置へ移動すると考えられる)。(31b)におけるQPの着地点として、*embd. SPEC (V)*、*embd. SPEC (T)*、さらに*embd. SPEC (Agr)*を想定することはできない(これらのSPECは、不定法形態の後位置にある)。つまり、(31b)におけるQPは、SPEC(C)と*matrix SPEC (T)*の間にあるSPEC位置へ移動すると考えられる(後述するように、当該QPは*matrix SPEC (T)*すると前提される)。

1.2節で指摘したように、DPが基底生成された位置にあるQPを残置する可能性がある(R-Tutti)。L-Tuttiにおいても、同様の可能性があるとして前提した場合には、以下の(34)が生成されることになる。²³⁾

(34) a. Gianni vuole leggerli tutti

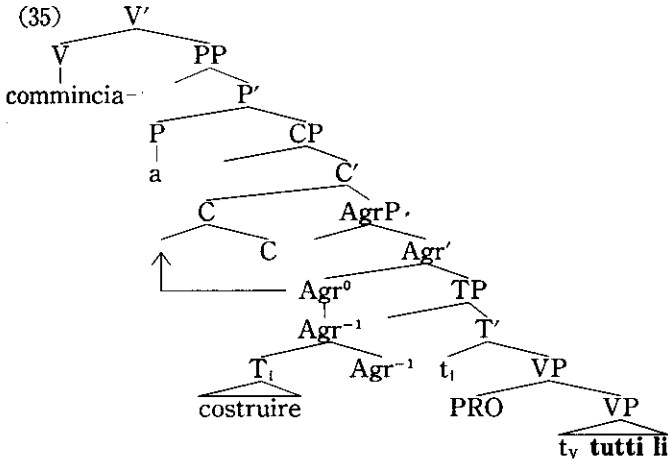
b. Gianni li vuole leggere tutti

'Gianni wants to read the books/they all'

V (*volere*)と同様にRESTR Verbに属すV (*cominciare*)の用例(31c-d)は、当該用例に生起する*a*をComplementizer(C)と考えた場合、問題を惹起

するように思われる。本稿では、RESTR Verb の特性として、embd. Agr⁰のCへの付加移動を前提した。語彙的に実現されたCへの付加移動は許容されないと考えられる。仮に許容された場合でも、問題が惹起する。つまり、embd. Agr⁰全体のCに対する付加移動が右方付加によって発動すると規定する必要がある。移動形式に関してX⁰範疇であるcliticは、機能範疇の主要部に左方付加する。少なくとも、X⁰範疇の付加移動が左方付加によって発動すると考えてみよう。その場合、不定法形態はC (a) の左方に生起することになる。²⁴⁾

本稿では、Modal RESTR Verbと異なり、Aspectual RESTR VerbとMotion RESTR VerbがPPを下位範疇化すると考える。RESTR Ruleが適用されると考えられる(31c-d)に対して、以下の構造(35)を想定する。²⁵⁾



基底生成された位置にある clitic (*li*) は、embd. V (t_v) から Acc を付与される。当該 clitic に対して SUBJECT として機能する要素として matrix Agr が指定される (embd. Agr は、Independent Active Agr in situ でない)。つまり、matrix AgrP が当該 clitic の GC となる。結果として、clitic (*li*) は、matrix Agr 位置へ付加移動することになる (この移動経路上には、「障壁」が存在しない)。(31c-d) で観察されるように、残置された QP (*tutti*) は、P (*a*) に先行する。つまり、当該 QP は、SPEC (P) と matrix SPEC (T) の間にある SPEC 位置へ移動すると考えられる。²⁶⁾ DP (clitic) 移動によって残置された QP の、例えば、embd. SPEC (Agr) 位置への移動が排除されるプロセスが問

題となる。

3. 提案 (仮説群)

3. 1. 残置された QP の移動は、基本的に X^0 Binding に従うと考えられる。しかしながら、(23a) の検討の箇所で指摘したように、残置された QP の移動に対して、定義体系 (25-29) を適用することはできない。具体的には、統率範疇 (GC) の定義 (27) を修正する必要がある (その他の定義は、単純な字句の変更には過ぎない。(26) と (28) はそのままの形で適用される)。以下に、残置された QP に適用される X^0 Binding の定義体系を示す (Tutti X^0 Binding と呼ぶ)。²⁷⁾

- (36) Binding Principle A (Tutti X^0 Binding) :
The trace of a stranded QP is bound by its antecedent in its governing category (GC) .
- (37) The definition of X^0 Binding (= (26)) :
YP is bound by X^0 iff YP and X^0 are coindexed and X^0 c-commands YP (c-command being defined with respect to a branching node X' or XP) .
- (38) The definition of Governing Category (GC) :
 β is a governing category for α iff β is the **minimal functional projection** containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α (cf. Aoun 1985) .
- (39) The definition of SUBJECT (= (28)) :
The SUBJECT consists of an **independent active Agr in situ** or of a subject assigned Acc Case (including its trace) which is in its base position or has moved from its base position to a SPEC position to fulfill Case Filter.
- (40) QP Placement Constraint (QPC) :
A stranded QP must move to the SPEC position of the highest functional X^0 element in its governing category if the movement strategy is adopted, (general principles of UG allowing) .

統率範疇 (GC) の定義 (38) は、最大投射 (XP) でなく、 X' 範疇を GC として

指定する(具体的には, Agr が SUBJECT として機能するため, Agr' が GC となる). 定義 (40) は, DP の移動によって残置された QP が基底生成された位置にとどまる可能性を含む.

上の仮説群は, R-Tutti の用例を適切に説明する. 例えば, (1) の用例において, 残置された QP (*tutti*) の GC となるのは matrix Agr' である (matrix Agr が SUBJECT として機能する). つまり, Movement Strategy が適用された場合, 当該 QP はその GC (matrix Agr') 内で最も高位の SPEC (SPEC (T)) 位置へ移動する. これは, (1b) を適切に文法的と予測する (QP が基底生成された位置にとどまる派生も (1b) を生成する). (8) においても, QP の GC となるのは, matrix Agr' である (Aux に下位範疇化された AgrP の主要部が **Independent Active Agr in situ** でない点に留意されたい). (8a-b) は, QP (*tutti*) が基底生成された位置にとどまる場合の派生である. (8c-d) は, 当該 QP が matrix SPEC (T) まで移動した場合のそれと考えられる (SPEC (V), SPEC (Agr) 等への移動は許容されない (cf. (40))).

3. 2. Fare 使役構文における R-Tutti もまた, 適切に説明される. 前述のように, (12a) 中の QP (*tutti*) は基底生成された位置にとどまっている. 当該 QP に対して GC を構成するのは, matrix Agr' である (embd. Agr は, **Independent Active Agr in situ** でない). つまり, 当該 QP の matrix SPEC (T) 位置への移動が発動することになる.

知覚構文 (Lasciare 使役構文) の用例もまた, 適切に説明される. (18b) において, embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した clitic (*la*) の GC となるのは, matrix AgrP である. 結果として, clitic (*la*) は, embd. SPEC (Agr) から matrix Agr 位置へ付加移動する. matrix Agr' が QP (*tutti*) の GC となる. つまり, Movement Strategy が発動した場合, 当該 QP は matrix SPEC (T) 位置へ移動することになる (これは, (20a) の派生を説明する). 結果として, (18b) は, QP (*tutti*) が基底生成された位置にとどまる場合の派生と考えられる. このように, 本稿の仮説群により, R-Tutti の用例は適切に説明される. L-Tutti の用例は, どうであろうか. (21b) と (22b) は, 問題なく生成する. 前述のように, (22b) における QP (*tutti*) は, 基底生成された位置にとどまっている. 一方, (21b) の QP は, SPEC (T) 位置まで移動している (当該 QP の GC となるのは, matrix Agr' である). (23) を検討する (便宜上, (41) として再掲する).

- (41) a. *ha promesso di tutti leggerli (Doetjes 1992: 27a)
 b. a promesso di leggerli tutti (Doetjes 1992: 28)
 'he has promised to read them all'

構造 (24) から判明するように, embd. Agr は **Independent Active Agr in situ** である。つまり, QP (*tutti*) の GC となる要素として, embd. Agr' が指定される。結果として, Movement Strategy が発動した場合, QP の移動は embd. SPEC (T) 位置までに限定される (clitic (*li*) の GC となるのは, embd. AgrP である)。つまり, 当該 QP の embd. SPEC (Agr) 位置への移動は排除される。これにより, (41a) の非文性が説明される。(42b) は, QP が基底生成された位置にとどまる, あるいは, embd. SPEC (T) 位置まで移動した場合の派生として説明される。同様の論法は, (31c-d) をも説明する (便宜上, (42a-b) として再掲する)。

- (42) a. Piero li comincerá tutti a costruire
 b. *Piero li comincerá a tutti costruire
 c. Piero li comincerá a costruire tutti
 'Piero will start to build them all'

構造 (35) において, embd. Agr は, **Independent Active Agr in situ** でない。よって, matrix Agr が QP に対して SUBJECT として機能する (matrix Agr' が QP の GC となる)。つまり, QP (*tutti*) は matrix SPEC (T) 位置へ移動することとなる (これは, (42a) の派生を説明する)。同様に, QP が embd. SPEC (C) 位置へ移動することも許容されない (これは, (42b) を非文と予測する)。QP が基底生成された位置にとどまる場合には, (42c) が生成されると考えられる。次に, (31a-b) を検討する (便宜上, (43a-b) として再掲する)。

- (43) a. (?)Gianni vuole tutti leggerli (Doetjes 1992: 30a-b)
 b. Gianni li vuole tutti leggere
 'Gianni wants to read them all'

(43b) は, 問題なく生成される。構造 (33b) において, **Independent Active Agr in situ** となるのは matrix Agr である (つまり, matrix Agr' が QP の GC

となる)。結果として、QP (*tutti*) は、matrix SPEC (T) 位置へ移動する。問題となるのは(43a)である。構造(33a)において、**Independent Active Agr in situ**となるのは、embd. Agrである(embd. Agr'がQPのGCとなる)。結果として、本稿の仮説群は、(43a)を生成不能として非文と予測する。本稿では、何らかのプロセスにより、QPのGCがembd. Agr'からembd. AgrPに拡張されると考える。ここで、embd. AgrP全体がSPEC (C)位置へ空移動している点に着目する。さらに、QPに対するGCの定義(38)を(44)のように修正することにする。

(44) The definition of Governing Category (GC) :

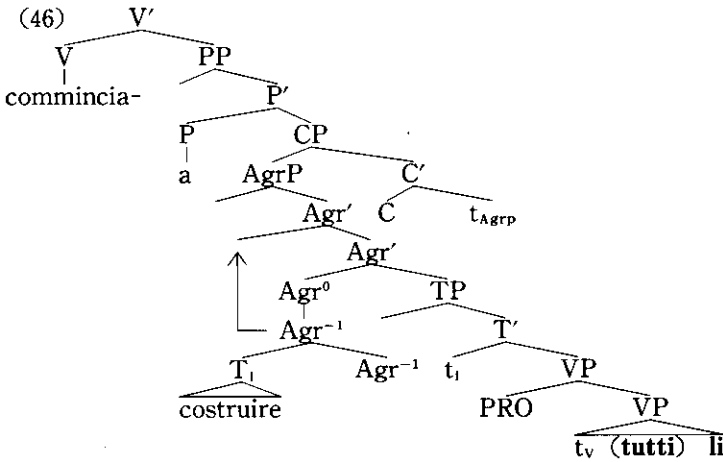
In Italian, β is an X^0 -GC for a stranded QP (α) iff

- (i) β , which is not vacuously moved, is the **minimal functional projection** containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α , or
- (ii) β , which is vacuously moved, is the **minimal functional maximal projection** containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α

結果として、(43a)中のQP (*tutti*)のGCとなるのは、embd. SPEC (Agr)である。これは、当該用例を適切に生成する。

ここで、(42a-b (31c-d))に対応し、RESTR Ruleが適用されない場合の構造を検討する。語彙的に実現されないCがそのsister (AgrP)をL標示しないと想定する(AgrP=Barrier)。結果として、embd. AgrP全体が、SPEC (C)位置へ空移動することになる(これにより、当該AgrPの「障壁」性が相殺される)。つまり、(45a)の構造として、以下の(46)が想定されることになる。

- (45) a. Piero commincerà a costruirli
 - b. *Piero tutti commincerà a costruirli
 - c. *Piero commincerà tutti a costruirli
 - d. Piero commincerà a tutti costruirli
 - e. Piero commincerà a costruirli tutti
- 'Piero will start to build them/them all'



clitic (*li*) に対して SUBJECT として機能するのは, embd. Agr である (当該 clitic の GC となるのは embd. AgrP である)。結果として, clitic (*li*) は, embd. Agr 位置へ付加移動する。これにより, (45a) が生成される。(44) が妥当すると前提した場合, 同じ構造 (46) における embd. AgrP が QP (*tutti*) の GC となる。結果として, 上の (45b-e) の予測が可能となる。²⁸⁾

3. 3. 最後に, 以下の用例を検討する。

- (47) a. *voglio tutti che vengano²⁹⁾ (Doetjes 1992: fn. 9)
 'I want them all to come'
 b. li ha tutti visti (ibid.)
 'he has seen them all'
 c. *ha tutto visto (ibid.)
 'he has seen everything'
 d. (?) voglio tutti vedergli (ibid.)
 'I want to see them all'
 e. *voglio tutto vedere (ibid.)
 'I want to see everything'

(47b) と (47d) は問題なく生成される。(47d) は, 残置された QP が SPEC

(T) 位置へ移動する派生として説明される (当該 QP の GC となるのは, matrix Agr' である). (47d) における QP (*tutti*) の SUBJECT を構成する要素は, SPEC(C)位置へ空移動した embd. Agr である (よって, 当該 embd. AgrP が QP の GC となる). つまり, 残置された QP は, embd. SPEC (Agr) 位置まで移動することになる.

(47a) において, QP は embd. V の sister 位置に生成される (Unaccusative Verb). DP としての pro が embd. SPEC (Agr) 位置へ移動することにより, QP が移動する可能性が生まれる. QP (*tutti*) に対して SUBJECT として機能するのは, embd. Agr である (embd. Agr' が当該 QP の GC となる). つまり, 残置された QP が移動する場合, その移動の上限として, embd. SPEC (T) が指定される. 結果として, (47a) は X⁰ Binding に抵触し, 非文と予測される. また, 本稿の仮説群によって生成されるのは, 以下の (48) である.

- (48) a. voglio che vengano tutti
 b. voglio che tutti vengano
 'I want to see them all'

(49b, d) で示されるように, (47c, e) に対応するフランス語用例は文法的と判断される.

- (49) a. il a vu tout
 b. il a tout vu
 'he has seen everything'
 c. je veux voir tout
 d. je veux tout voir
 'I want to see everything'

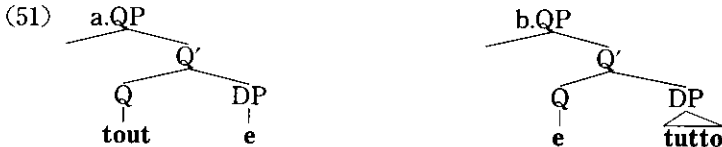
イタリア語の要素 (*tutto*) は, 上位の SPEC 位置に移動しないと考えられる. つまり, 当該要素は基底生成された位置にとどまると考えられる. その場合生成されるのは, 以下の (50) である.

- (50) a. ha visto tutto
 'he has seen everything'

b. voglio vedere tutto

'I want to see everything'

本稿の論法によると、残置された QP が上位の SPEC 位置へ移動するのは、Q によって下位範疇化される DP 要素が何らかの引き金によって移動する場合に限定される。イタリア語の要素 (*tutto*) が QP でなく、DP であると考えてみよう。その場合、DP としての *tutto* の移動を発動させる誘引が存在しない。結果として、DP (*tutti*) は基底生成された位置にとどまることになる。フランス語の要素 (*tout*) は、どのように説明されるか、更なる調査が必要であるが、本稿では、フランス語の要素 (*tout*) に対して以下の構造 (51a) を想定する。



フランス語では、空の clitic DP (*e*) が機能範疇の主要部位置へ移動する。これにより、残置された QP の移動が可能となる。イタリア語の要素 (*tutto*) に対して、(51b) の構造を想定した場合も、DP (*tutto*) が上位 SPEC 位置へ移動することはない (DP (*tutto*) は clitic でない。また、当該要素は、それが基底生成された位置で格を付与される。何れにせよ、DP (*tutto*) の移動を発動させる誘引は存在しない) (詳細は、稿を改めて検討する)。

4. 予測体系と結語

4. 1. Fare 使役構文における予測体系を示す。最初に, embd. V の DO としての QP の用例を検討する (L-Tutti)。

(52) a. Piero farà leggere tutti i libri a Gianni

'Piero will make Gianni read all the books'

b. *Piero farà li leggere tutti a Giannic. *Piero farà li tutti leggere a Giannid. Piero li farà leggere tutti a Gianni

- e. Piero li farà tutti leggere a Gianni
 'Piero will make Gianni read them all'

(52)の構造は、(17)のそれに並行するものである。matrix Agr が clitic (*li*) に対して SUBJECT として機能する (embd. Agr は, Independent Active Agr in situ でない)。よって、当該 clitic の GC となるのは、matrix AgrP となる。結果として、clitic (*li*) は、matrix Agr 位置へ付加移動する。これは、(52b-c) を非文と予測する ((52a) は問題なく生成される)。残置された QP (*tutti*) に対して GC となる要素は何であろうか。前述のように、embd. Agr は, Independent Active Agr in situ でない (よって、当該 QP の SUBJECT として機能しない)。matrix Agr が SUBJECT として機能することになる。結果として、当該 QP に対して GC となるのは、matrix Agr' である。つまり、残置された QP (*tutti*) は、移動する場合、matrix SPEC (T) 位置へ移動することになる。言うまでもなく、QP (*tutti*) が基底生成された位置にとどまる場合の派生も可能である。これは、(51d-e) を文法的と予測する。tutto が基底生成された位置にとどまるする前提が妥当する場合、以下の (53) の予測が可能となる。

- (53) a. Piero farà leggere tutto a Gianni
 'Piero will make Gianni read everything'
 b. *Piero farà tutto leggere a Gianni
 c. *Piero farà gli leggere tutto
 d. *Piero farà gli tutto leggere
 e. Piero gli farà leggere tutto
 f. *Piero gli farà tutto leggere
 'Piero will make him read everything'

CV が DP (*tutto*) に Acc を付与するため、主語 DP (*Gianni, gli*) は embd. VP に右方付加した位置に生成される (cf. fn. (12))。主語 clitic (*gli*) に対して SUBJECT として機能するのは、matrix Agr である。よって、当該主語 clitic は matrix Agr 位置へ付加移動する。これにより、(53c-d) は非文と予測される。DP (*tutto*) が基底生成された位置にとどまると考えられる。よって、(53 f) は非文と予測される (同時に、Fare 使役構文に対して想定される構造 (17) では、DO DP が不定法形態に先行する派生 (53f) は生成不能である)。次に、

embd. V の主語要素が QP として生起する用例を検討する。フランス語と同様に、Acc を付与される QP (DP) だけでなく、Dat を付与される QP (DP) の場合も、DP の移動によって残置された QP が上位 SPEC 位置へ移動可能と考えてみよう。³⁰⁾

- (54) a. Piero farà leggere il libro a tutti i amici
 b. *Piero farà tutti leggere il libro ai amici
 c. *Piero farà leggere tutti il libro ai amici
 'Piero will make all the friends read the book'
 d. *Piero loro farà tutti leggere il libro
 e. *Piero loro farà leggere tutti il libro
 f. *Piero loro farà leggere il libro a tutti
 'Piero will make them all read the book'

前述のように、CV が DO DP (*il libro*) に Acc を付与するため、主語 QP (*tutti i amici*) は embd. VP に右方付加した位置に生成される。仮に、VP に右方付加した QP に限り、Q の sister 要素 (DP) の移動を許容する仮説 (6) が (54) に対しても適用されると考えて見よう。つまり、Q の sister 要素の移動が許容されない。よって、QP が残置される可能性はない。結果として、QP (*tutti*) が上位の SPEC 位置へ移動する可能性もないことになる。

embd. V が自動詞の場合には状況が異なる。embd. V の主語要素は、VP に左方、あるいは右方付加した位置において、CV から Acc を付与される (fn. (13))。つまり、Q の sister 要素が移動し、QP を残置する可能性がある。

- (55) a. Maria faceva lavorare molto tutti i amici
 'Maria made all the friends work a lot'
 b. *Maria faceva lavorarli molto tutti
 c. *Maria faceva tutti lavorarli molto
 d. Maria li faceva lavorare molto tutti
 e. *Maria li faceva lavorare tutti molto
 f. Maria li faceva tutti lavorare molto
 'Maria made them all work a lot'

(55a) は問題なく生成される。embd. Agr は、**Independent Active Agr in situ** でない。基底生成された主語 clitic (*li*) に対して SUBJECT として機能する要素は、matrix Agr である (当該 clitic の GC として matrix AgrP が指定される)。つまり、当該 clitic (*li*) は、matrix Agr 位置へ付加移動する。これは、(55b-c) を非文と予測する。(55d) は、残置された QP が基底生成された位置にとどまる派生として説明される (文法的と予測される)。

残置された QP (*tutti*) の GC となるのは、matrix Agr' である。よって、移動の Strategy が発動した場合の QP は、matrix SPEC(T) 位置まで移動する。これは、(55e, f) の相違を説明する ((55e) 中の QP は、matrix SPEC (T) 位置まで移動していない)。

4. 2. 次に、知覚構文 (Lasciare 使役構文) における予測体系を示す。CV が embd. V の主語要素に格を付与する派生では、Fare 使役構文と同様の予測が期待される。ここでは、matrix V が単独で、embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した主語要素に Acc を付与する派生を検討する。

- (56) a. Maria vedrà/lascerà tutti i amici riparare la macchina
 b. Maria vedrà/lascerà i amici riparare tutti la macchina
 c. *Maria vedrà/lascerà i amici riparare la macchina tutti
 'Maria will see/let all the friends repair the car'
 d. *Maria vedrà/lascerà tutti li riparare la macchina
 e. Maria li vedrà/lascerà tutti riparare la macchina
 f. *Maria vedrà/lascerà ripararli la macchina tutti
 g. *Maria vedrà/lascerà ripararli tutti la macchina
 h. Maria li vedrà/lascerà riparare tutti la macchina
 'Maria will see/let them all repair the car'

不定法形態 (*riparare*) を含む Agr⁻¹全体が embd. Agr' 位置へ付加移動している。(56a) は、QP (*tutti i amici*) 全体が、Case Filter の要請によって、embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した場合の派生である。DP (*i amici*) が単独で embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した場合にも、当該 DP (QP) に対する Case Filter の要請は満たされる。その場合、DP の移動によって残置された QP は、上位の SPEC 位置へ移動可能となる。この場合、残置された QP (*tutti*) に対し

て SUBJECT として機能する要素は, embd. Agr, あるいは embd. SPEC(Agr) 位置に移動することにより Acc を付与される DP (*i amici*) である。つまり, 当該 QP の GC となるのは, embd. Agr', あるいは embd. AgrP である。結果として, QP に対する Movement Strategy が発動する場合には, 当該 QP (*tutti*) は, embd. SPEC(T) 位置まで移動することになる(embd. SPEC(Agr) 位置は, 既に DP 要素 (*i amici*) が移動しているため, embd. AgrP が QP の GC となる場合でも, 同様の出力が期待される)。これは, (56b) を説明する。

(56b) はまた, 残置された QP が基底生成された位置にとどまる場合の出力でもある。この論法は, (56c) を非文と予測する(主語 QP は, embd. VP に右方付加した位置に生成される (cf. 仮説 (6)))。

次に, embd. V の主語要素である DP が clitic で実現された場合の用例を検討する。前述のように, clitic は格が付与された段階で, 機能範疇の主要部に付加移動する (Cliticization)。最初に, DP を含む主語 QP 全体が SPEC (Agr) 位置へ移動する場合を考える。(56d) は, clitic DP (*li*) が embd. SPEC (Agr) 位置にとどまっているため, 非文と予測される (Cliticization は義務的に発動する)。QP の移動に伴って embd. SPEC (Agr) へ移動した clitic DP は, その GC 内部にある最上位のゼロ機能範疇に移動する必要がある。³¹⁾ embd. SPEC (Agr) 位置にある clitic (*li*) の GC となるのは, matrix AgrP である (matrix Agr が SUBJECT として機能する)。よって, 当該 clitic は, matrix Agr 位置へ義務的に付加移動する。この論法は, (56e) を文法的と予測する ((56e) は, DP (*li*) の移動によって残置された QP が embd. SPEC (Agr) からその GC (matrix Agr') 内部で最上位の SPEC 位置 (matrix SPEC (T) 位置へ移動した場合の出力と同形である)。DP (*li*) が単独で embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した場合には, (56f-h) の予測がなされる。QP が embd. V の DO 要素として生起する用例では, どのような予測がなされるであろうか。

- (57) a. Maria vedrà/lascerà Gianni leggere tutti i libri
 'Maria will see/let Gianni read all the books'
 b. *Maria vedrà/lascerà Gianni leggere tutti li
 c. Maria vedrà/lascerà Gianni leggerli tutti
 'Maria will see/let Gianni read them all'
 d. Maria vedrà/lascerà Gianni leggere tutto
 e. *Maria vedrà/lascerà Gianni tutto leggere

'Maria will see/let Gianni read everything'

embd. SPEC(Agr)位置に移動した主語 DP(*Gianni*), あるいは, embd. Agr は, clitic (*li*) と残置されたQP (*tutti*) に対して SUBJECT として機能する。つまり, embd. AgrP が clitic(*li*)の GC となる。よって, 当該 clitic は, embd. Agr 位置へ義務的に付加移動する。また, 残置されたQP (*tutti*)の GC となるのは, embd. Agr' (あるいは, embd. AgrP) である。いずれの場合でも, 残置されたQP に対する Movement Strategy が発動する場合には, 当該QP は embd. SPEC (T) 位置まで移動する。これにより, (57b-c) が説明される。言うまでもなく, (57c) は, 残置されたQP が基底生成された位置 (embd. V の sister 位置) にとどまる場合の派生と同形である。また, DP (*tutto*) に対しては, (57d-e)の予測がなされる(当該要素は, 基底生成された位置にとどまる)。

4. 3. 結語

本稿において, イタリア語の R-Tutti と L-Tutti を同時に説明する論法(仮説群)が提示された。両事象は, Universal Quantifier によって下位範疇化されるDP 要素が, 何らかの引き金によって移動した場合に発動する。当該DP の移動によって残置されたQP は, それが基底生成された位置にとどまる可能性をもつ。当該QP に対して Movement Strategy が発動した場合の局所性は, clitic 要素の移動において観察される局所性を説明する仮説に類似する論法(仮説(36-40)と(44))によって説明可能である。

4. 1 から 4. 2 節で提示された本稿の仮説群による予測体系を更に検討・調査した上で, これらの仮説群を修正する必要があることは言うまでもない。

註

- 1) clitic 要素には, 下線を付す。Quantifier には, 二重下線を付す。
- 2) DP (*gli amici*) は, SPEC (Q) 位置を経由して移動すると考える。SPEC-HEAD Agreement の適用により, Q (*tutti*) と DP は同一指標の関係となる。また, QP に対する Case Filter の要請は, QP, あるいは DP に格が付与されることにより満たされると想定する。L-Tutti に対しても同様の前提が設定される。
- 3) clitic の付加移動 (Cliticization) に関しては後述する。
- 4) 後述するように, 残置されたQP は, それが基底生成された位置にとどまる, あるいは, SPEC (T) 位置へ移動すると考えられる。
- 5) Guasti (1991: p. 216) は, 以下の (i) のようなカタロニア語用例を取り扱う Bonet (1990) を引用して, イタリア語でも, [\pm Finite]AgrP 内の主語要素が VP の右方に生成される

と主張する (Bonet (1990) では、主語要素が V' の右方にある SPEC (V) 位置に生成されると想定される)。

- (i) a. *ha ficat el jersei al calaix en Ferran* (Bonet 1990: 11a-c)
 b. **ha ficat en Ferran el jersei al calaix*
 c. **ha ficat el jersei en Ferran al calaix*
 'Ferran has put the sweater in the drawer'
 d. *els nens havien recitat el poema tots* (ibid.: fn. 13)
 'all the children had recited the poem'

本稿では、以下の (ii-iii) が示すように、主語要素が VP に左方、あるいは右方付加した位置に生成可能と考える (例えば、主語要素の素性 [±Definite] が関与するように思われる。詳細は、稿を改める)。

- (ii) a. *ha telefonato Masiero* (Benicà and Salvi 1991: p. 124, 24a)
 'Masiero has telephoned'
 b. ??*ha telefonato Masiero all'avvocato* (ibid.: 25e)
 'Masiero has telephoned to the lawyer'
 c. *ha telefonato una ragazza a tuo fratello* (ibid.: 26e)
 'a girl has telephoned to your brother'
- (iii) a. *l'ha mangiata la mamma* (ibid.: p. 125, 28a-b)
 'Mother has eaten it'
 b. ??*ha mangiato la torta la mamma*
 'Mother has eaten the cake'
 c. *ha mangiato la torta un gato* (ibid.: p. 125, 28)
 'a cat has eaten the cake'

フランス語の [-Finite] AgrP 内の主語に対しても同様の前提が可能であろう。 [+Finite] AgrP 内の主語に関しては、文体倒置 (Stylistic Inversion) 以外では、主語要素が VP に左方付加した位置に生成されると考えられる (Stylistic Inversion では、主語要素が VP に右方付加した位置に生成される)。仮説 (6) がフランス語にも適用されると想定した場合、以下の用例 (iv) が説明可能となる。

- (iv) a. **quand ont tous dormi les enfants?* (Doetjes 1992: 7)
 'when have all the children slept?'
 b. ??*les enfants ont vu ce film tous* (Doetjes 1992: 8b)
 'all the children have seen this movie'

6) Belletti (1990) は、Sportiche (1988) と同様に、QP 全体が上位の SPEC 位置へ移動した段階で、DP の移動により QP が残置されると考える。前述のように、本稿では、基底生成された位置にある QP が、DP の移動によって残置された段階で上位の SPEC 位置へ移動すると考える。以下の英語用例 (ia-b) は、英語において、V の sister 位置に基底生成される QP 内部からの DP の移動が許容されないことを示すであろう (cf. Doetjes 1992)。

- (i) a. **the children were seen all* (Doetjes 1992: 4a-b)
 b. **the children have arrived all*
 c. *the children were all seen*
 d. *the children have all arrived*
 e. *the children all were seen*

f. the children all have arrived

更なる検討が必要であるが、英語では、QP全体が上位のSPEC位置へ移動した段階でDPが当該QPを残置すると考えられる(残置されたQPが上位のSPEC位置へ移動することになる。詳細な検討を稿を改める)。この前提の下でも、(1e-f)は問題を惹起するように思われる。DP (*the children*) がSPEC (Agr) 位置へ移動すると考えた場合、当該DPと助動詞要素(定動詞)との間にはSPEC位置が存在しない。以下の(iiB)でも明らかのように、この状況は、スペイン語のR-Tuttiにも観察される(フランス語とイタリア語には、このような状況は存在しない。イタリア語に関しては、(5b)の非文性に留意されたい)。

(ii) a. todos los niños están llorando (Moore 1991: p. 104, 21a-d)

b. los niños todos están llorando

c. los niños están todos llorando

d. los niños están llorando todos

'all the children are crying'

(ie-f) と (iiB) は、DPがAgrPに付加移動するStrategyを想定することにより打開されるであろう(この場合、残置されたQPがSPEC (Agr) 位置へ移動することにより、Case Filterが満たされる)。

第3節において設定される仮説群によると、残置されたQP (*todos*) の統率範疇(GC)となるのは、matrix Agr'である。つまり、当該QPは、matrix SPEC (T) 位置まで移動可能である(matrix SPEC (Agr) 位置への移動は許容されない)。結果として、GCをmatrix Agr'から最大範疇matrix AgrPへ拡張する必要が生まれる。この効果は、AgrPが空移動する場合にGCをAgr'からAgrPへと拡張する以下の仮説(44)を付加構造を形成するAgrPにも適用することによりもたらされる。

AgrPへの付加移動を想定するStrategyは、European PortugueseのImpersonal SE Passiveを取り扱うRaposo and Uriagereka (1990)にも見られる(詳細に渡る検討は、稿を改める)。

- 7) 英語の場合と異なり、ロマンス諸語においてVP-Preposingは観察されない。これは、ロマンス諸語のAuxがそのsisterであるAgrPを θ 統率しないことを物語るものであろう(cf. Haverkort 1992: p. 199)。結果として、当該AgrPが「障壁」(Barrier)となる可能性が生じる。つまり、DP (*gli amici*) のmatrix SPEC (Agr) への移動が排除される可能性が生まれる。しかしながら、この「障壁」性は、Auxに下位範疇化されるAgrPが当該SPEC (Aux) 位置へ空移動すると考え、更に、以下の(i)のL標示定義を採用することにより相殺される。

(i) Definition of L-Marking: Where α is a lexical category, α L-marks β iff β agrees with the head of γ that is θ -governed by α . (Chomsky 1986: p. 24)

任意の最大範疇(XP)がそれ自身とその主要部(X)一致すると前提すると、 α はそれが θ 統率する範疇 β をL標示することになる。

- 8) 主語DP (QP) は、SPEC (Agr) 位置を通過しないと考えられる。(8a)で観察されるように、Aux (*avere*) による能動完了時制における主語DP (QP) は過去分詞形態(*salutato*)と性・数に関して一致することはない。仮に、当該主語要素がSPEC (Agr 2) を通過すると考えた場合、SPEC-HEAD Agreementにより、過去分詞形態は男性複数形(*salutati*)で生起することになる。
- 9) Doetjes (1992) は、主語要素がSPEC (V) 位置に生成されると考える。また、*tous* が最大範疇と想定される(本稿では、*tous (tutti)* がQPの主要部と想定される)。

- 10) (10c) は、文法的と考えられる。これは、以下の (i) によっても例証される。
- (i) *les gars sont allés tous au cinéma* (Jaeggli 1982: p. 77)
 'all the boys went to the movies'
- 11) 以下の (i) が示すように、対応するスペイン語でも (11a) と同様の語順となる。
- (i) (Guasti 1991: fn. 9)
- a. *i professori fanno commentare tutti lo stesso libro a Lia*
 'all the professors make Lia comment on the same book'
- b. *los profesores hacen trabajar todos sobre el mismo tema a sus alumnos*
 'all the professors makes their students work on the same topic'
- 12) 詳細は、石岡 (1993, 1994) を参照されたい。CV による格付与に関して、以下の (i) が前提されている。
- (i) a. CV has the Case Array Acc (Dat) .
 b. Case-assignment is optional.
 c. When a verb assign Case, its entire Case Array must be assigned.
 d. Acc is assigned only under Adjacency.
 e. CV loses its property of assigning Case when the Case in question has already been assigned by the embd.V (t_v) .
 f. In the perception construction and *Lasciare* causative, matrix V has the Case Array Acc ((ia-d) adapted from Goodall 1987)
- CV が DP (*quella pagina*) と主語 DP (*Gianni*) のそれぞれに Acc, Dat を付与するためには、CV と DP (*quella pagina*) が隣接する必要がある (Adjacency)。結果として、embd. V の主語 (*Gianni*) は、VP に右方付加した位置に生成されることになる。
- 13) 本稿と異なり、[±Finite] IP (AgrP) 内の主語要素が VP に右方付加した位置に生成されると仮定されている点に留意されたい。(15) の構造において、副詞要素 (*molto*) はどの位置に生成されるのであろうか。主語が生成される位置と CV (matrix V⁰) の間に生成されるであろう。それでは、如何なるプロセスにより、InfP 内部の主語要素 (*Gianni*) に Acc が付与されるのか (Guasti (1991) では、そのプロセスが明示されない)。副詞要素 (*molto*) の存在が Acc 付与に対する Adjacency に抵触するのではないだろうか。この問題は、本稿で前提される使役構文の構造にも当てはまるものである。何らかのプロセスによって、この場合の副詞要素が隣接性 (Adjacency) に関与しないと前提する必要がある。仮に、Adjacency に関与する要素として、SPEC 位置に生成される要素と XP 範疇に付加した位置に生成される要素が指定されると考える。加えて、副詞要素 (*molto*) が、X' 範疇に付加した位置に生成されると想定する (具体的には、本稿で前提される Fare 使役構文の構造 (17) に対応する構造) において、当該副詞が embd. T' に左方付加した位置に生成されると考える。これにより、CV による主語要素 (*Gianni*) に対する Acc 付与が可能となる ((17) に対応する構造でも同様であり、CV は、embd. VP に左方付加した位置に生成される主語 (*Gianni*) に Acc を付与可能である)。V の sister 位置に生成される DO 要素は、Adjacency に関与する。主語要素 (*Gianni*) が embd. VP に左方付加した位置に生成される場合にも、(14) が生成され、以下の (i) は生成不能である。
- (i) *Maria faceva lavorare Gianni molto*
 'Maria made Gianni work a lot'
- (i) に関連する問題点は、稿を改めて検討する。
- また、V⁻¹ (*fa-*) が I の MSS 位置へ移動し、matrix V⁰ 全体が I⁰ へ付加移動することを可能にするため、相対化された最小原理 (Relativized Minimality) と C 統率 (C-command) を (ii-iii) のように修正する (この修正の適格性に関しては、本稿では言及され

ない)。

(ii) Relativized Minimality (Guasti 1991: 19) :

X β -governs Y iff there is no Z such that:

(a) Z is a base position;

(b) Z is β -GT compatible with Y;

(c) Z c-commands Y but it does not c-command X,
where $\beta = [A, A', X^0, X^{-1}]$

(iii) The Definition of c-command (Guasti 1991: fn. 11)

α c-commands β iff at least one segment of α does not dominate β and for every X' projection γ if γ dominates α then γ dominates β .

- 14) (1a)において, *pro* が SPEC (I) (SPEC (Agr)) 位置へ移動していないことになる。つまり, I (Agr) 位置にある定動詞が, VP に右方付加した位置に生成される QP (*tutti gli amici*) に Nom を付与する (cf. Contreras 1991)。換言すれば, 主語である空範疇 (*pro*) は, SPEC (Agr) ([+Finite]) 位置へ移動することにより, 同定されると考えられる (Identification)。
- 15) Burzio (1978) は, (17c) を (?) と判断する。本稿では, 当該用例が基本的に文法的と考える。さらに, Burzio (1978) は, 同じ箇所以下 (i) の用例を挙げる。
- (i) a. Mario fece Giovanni accendere la luce
b. Mario fece accendere la luce a Giovanni
'Mario made Giovanni turn the light'
- 標準イタリア語では, (ia) は非文と判断される。つまり, (1) は, Fare 使役構文が知覚構文 (Lasciare 使役構文) の挙動を示す方言の存在を明示するものである。
- 16) Fare 使役構文, 知覚構文と Lasciare 使役構文における Clitic 移動に関しては, 後述する。
- 17) 石岡 (1993, 1994) と同様に, clitic は, 格が付与された段階で機能範疇の主要部 ((18) の場合, 構造 (19) の SPEC (Agr₂) を経由して, matrix Agr) に付加移動すると考える (後述)。
- 18) 残置された QP の SPEC (Asp) 位置への移動に関しては, 後述する。
- 19) 詳細に渡る検討は稿を改めるが, スペイン語においては, L-Todos が存在しないと考えられる。(i-ii) で示されるように, スペイン語では, Redoubled Clitic (RC) Strategy が発動すると思われる。
- (i) a. *las ví a todas las mujeres (Jaeggli 1982: p. 63) 'I saw all the women'
b. las ví (a) todas (ibid.) 'I saw them all'
c. lo ví todo (ibid.: p. 70)
- (ii) a. Pedro ha querido verlos todos (Jaeggli 1982: p. 75)
b. *Pedro ha todos querido verlos (ibid.)
'Pedro wanted to see them all'
- 20) Accessibility は以下のように定義される。
 α is accessible to β iff β is in the c-command domain of α and coindexing of (α , β) would not violate the i/i condition (cf. Aoun 1985: p. 30)。
詳細は, 石岡 (1993, 1994a, b) を参照されたい。なお, 石岡 (1994a, b) では, 主として, clitic の基底生成を規制する XP Binding の概念も導入される。本稿で前提される束縛理論では, PRO が SUBJECT となることはない。
- 21) Kayne (1989) と同様に, Cliticization において, 移動によって空となった X⁰ 範疇への

- 付加移動は排除され、Relativized Minimalityが発動しないと前提する。
- 22) 言うまでもなく、不定法形態の動詞は, embd. Agr 位置でなく、構造(24)に対応する位置(embd. Agrに付加した位置)にある。
- 23) (34a)において、残置されたQPが embd. SPEC (V), あるいは embd. SPEC (T) 位置へ移動すると考えた場合も、同様の結果となる。(34b)においては、残置されたQPが embd. SPEC (V), embd. SPEC (T), あるいは embd. SPEC (Agr) 位置へ移動すると想定した場合も、同様となる。第3節で述べるように、上の可能性は否定される((34 a-b)中のQP (*tutti*)は、基底生成された位置にある)。
- 24) Agr⁻¹全体としての不定法形態が、C, あるいはC'位置に付加移動すると考えた場合にも同様の問題が惹起する。
- 25) Non RESTR VerbであるV (*promettere*)は、CPを下位範疇化すると考えられる。つまり、(23)における*di*はCと想定される。
- 26) QP (*tutti*)が基底生成された位置にとどまる場合には、以下の(i)が生成する。
- (i) Piero **li** comincerà a costruire tutti
 'Piero will start to build them all'
- また、RESTR Ruleが適用されない場合には、embd. AgrP全体がSPEC (C)位置へ空移動する(語彙的に実現されないCはそのsister要素(AgrP)をL標示しない)。当該規則が適用されない場合の予測に関しては後述する。
- 27) 以下の定義体系は、R-TuttiとL-Tuttiの双方に適用される。
- 28) (45b-e)に下される文法性判断は未調査である(さらに検討する必要がある)。
- 29) (47a, c, e)に対応するフランス語用例は文法的と判断される。(47a)に対応するフランス語用例に関しては、石岡(forthcoming)で言及される。(47c, e)に対応するフランス語に関しては、後述する。
- 30) これは、少なくとも、以下のフランス語用例で観察される。
- (i) a. **j'ai parlé à mes amis à tous* (Milner 1987: 26a)
 'I spoke to all my friends'
 b. **j'ai tous parlé à mes amis* (ibid.: 26b)
 c. *je leur ai parlé à tous* (ibid.: 26c)
 d. *je leur ai tous parlé* (ibid.: 27)
 'I spoke to them all'
- (ic)は、残置されたQPが基底生成された位置にとどまる場合、DatがQP(*tous*)とDP(*leur*)の双方に付与されることを示す。
- 31) 厳密には、当該clitic要素が embd. SPEC (Agr) 位置に移動したQPのSPEC位置を経由してゼロ機能範疇に付加移動すると考えた方がより妥当するものであろう。

参考文献

- Aoun, J. (1985). *A Grammar of Anaphora*. MIT Press, Cambridge (Mass.)
- Baker, M. C. (1988). *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Belletti, A. (1990). *Generalized Verb Movement*. Rosenberg & Selier, Torino.
- Benicà, P. and G. Salvi (1991). "L'ordine degli elementi della frase e le costruzioni marcate." Renzi, L. (ed.) *Grande grammatica italiana di consultazione*. il Mulino,

- Bologna.
- Bonet, E. (1990) . "Subjects in Catalan." *MIT Working Papers in Linguistics* 13, 1-26.
- Bordelois, I. (1988) . "Causatives: From Lexicon to Syntax." *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 57-93.
- Burzio, L. (1978) . "Italian Causative Constructions." *Journal of Italian Linguistics* 3, 1-71.
- Burzio, L. (1986) . *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Reidel, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986) . *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Contreras, H. (1991) . "On the Positions of Subjects." Rothstein, S. (ed.) *Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure, Heads and Licensing*. Academic Press, London.
- Doetjes, J. (1992) . "Rightward Floating Quantifiers Float to the Left." *The Linguistic Review* 9/4, 313-332.
- Giusti, G. (1991) . "The Categorial Status of Quantified Nominals." *Linguistische Berichte* 136, 438-454.
- Goodall, G. (1987) . "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives." Neidle, C. and Rafael A. Nuñez Cerdeño (eds.) *Studies in Romance Languages*. Foris, Dordrecht.
- Guasti, M. T. (1991) . "Incorporation, Excorporation and Lexical Properties of Causative Heads." *The Linguistic Review* 8, 209-232.
- Haverkort, M. (1992) . "Clitics, Affix Order and the ECP." *WCCFL* 10, 197-207.
- Jaeggli, O. (1982) . *Topics in Romance Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Kayne, R. (1975) . *French Syntax: the Transformational Cycle*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Kayne, R. (1984) . *Connectedness and Binary Branching*. Foris, Dordrecht.
- Kayne, R. (1989a) . "Facets of Romance Past Participle Agreement." Benicà, P. (ed.) *Dialect Variation and the Theory of Grammar*. Foris, Dordrecht.
- Kayne, R. (1989b) . "Null Subjects and Clitic Climbing." Jaeggli, O. and K. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*. Kluwer, Dordrecht.
- Kayne, R. (1991) . "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO." *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991) . "The Position of Subjects." *Lingua* 85, 211-258.
- Milner, J. -C. (1987) . "Interpretive Chains, Floating Quantifiers and Exhaustive Interpretations." Neidle, C. and R. A. Nuñez Cedeño (eds.) *Studies in Romance Languages*. Foris, Dordrecht.
- Moore, J. (1991) . *Reduced Constructions in Spanish*. Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Ouhalla, J. (1989) . "Clitic Movement and the ECP: Evidence from Berber and Romance Languages." *Lingua* 79, 165-215.
- Ouhalla, J. (1991) . *Functional Categories and Parametric Variation*. Routledge, London and New York.
- Pearce, E. (1990) . *Parameters in Old French Syntax: Infinitival Complements*. Kluwer, Dordrecht.
- Quicoli, C. (1976) . "Conditions on Quantifier Movement in French." *Linguistic Inquiry* 7, 583-607.

- Radford, A. (1979). "Clitics under Causatives in Romance." *Journal of Italian Linguistics* 4, 137-181.
- Raposo, E. and J. Uriagereka (1990). "Object Agreement in the European Portuguese." Dziwirek, K., P. Farrell, and E. Mejías-Bikandi (eds.) *Grammatical Relations, A Cross-Theoretical Perspective*. Stanford Linguistic Association.
- Reed, L. (1990a). "Biclausality, Barriers and the French Causative Construction." *Cahiers Linguistiques d'Ottawa* 18, 79-93.
- Reed, L. (1990b). "Adjunctions, X⁰ Movement, and Verbal Government Chains in French Causatives." *MIT Working Papers in Linguistics* 12, 161-176.
- Reed, L. (1991). "The Thematic and Syntactic Structure of French Causatives." *Probus* 3.3, 317-360.
- Reed, L. (1992). "Remarks on Word Order in Causative Constructions." *Linguistic Inquiry* 23, 164-172.
- Rizzi, L. (1982). *Issues in Italian Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Roberts, I. (1991). "Excorporation and Minimality." *Linguistic Inquiry* 22.1, 209-218.
- Sportiche, D. (1988). "A Theory of Floating Quantifier and Its Corollaries for Constituent Structure." *Linguistic Inquiry* 19, 33-60.
- Van Tiel Di-Maio, M. F. (1978). "Sur le phénomène dit du déplacement long des clitiques et, en particulier, sur les constructions causatives." *Journal of Italian Linguistics* 3, 73-136.
- Zubizarreta, M. (1986). "Le Statut Morpho-Syntaxique des Verbes Causatives dans les Langues Romanes." M. Ronat & D. Couquaux (eds.) *La Grammaire Modulaire*, Les Éditions de Minuit, Paris.
- Zubizarreta, M. (1987). *Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax*. Foris, Dordrecht.
- 石岡精三 (1992). 「フランス語 *Faire* 使役構文における CM clitics (Case-Marked Clitics) と NCM clitics (Non Case-Marked clitics) の相違について」長岡技術科学大学「言語・人文科学論集」6号, 71-100.
- 石岡精三 (1993). 「Laisser/Faire 使役構文における格付与と Clitic 移動について」『ロマンス語研究』26号, 115-133.
- 石岡精三 (1994a). "Some Facets of Cliticization in the Spanish Causative Construction." *NIDABA* (Linguistic Society of West Japan) 23, 1-12.
- 石岡精三 (1994b). 「フランス語とイタリア語における受動使役構文について」『ロマンス語研究』27号, 53-65.
- 石岡精三 (forthcoming). 「フランス語における R-Tous と L-Tous について—イタリア語の並行事象との比較において—」長岡技術科学大学「言語・人文科学論集」8号.